

黒田学長再任の年

昭和 60 (1985) 年度といえば、今後も日本史年表に末永く掲載されつづけて行くであろう大きな出来事が目白押しに起こった年度であった。

年度が改まる間際の 3 月 17 日には、茨城県つくば市で「科学万博つくば '85 (EXPO '85)」が開幕し、9 月 16 日まで催された。3 月 22 日には厚生省 (当時) が国内エイズ患者第 1 号を認定した。これを契機に、テレビ・新聞・週刊誌等の過熱報道もあって、日本国中にいわゆるエイズ・パニックが巻き起こった。年度始めの 4 月 1 日には、民営化により日本たばこ産業株式会社 (JT) と日本電信電話株式会社 (NTT) が開業した。6 月 15 日には、金の現物まがい商法により悪名をはせた豊田商事の社長が刺殺されるという陰惨な事件が起きた。この悪徳商法の被害届は 2 万 5 千件にも及んだ。8 月 12 日には、ボーイング 747SR 機が群馬県御巢鷹山中に墜落・炎上し、死者 520 名という世界の航空機事故史上の最大の惨事となった。プロ野球界では 10 月 26 日に阪神タイガースが 21 年ぶりに優勝し、大阪・兵庫周辺は狂喜乱舞に沸いた。翌昭和 61 (1986) 年 2 月 21 日には、鹿児島県の徳之島で長寿世界一 (当時) とされていた泉重千代氏が死去した。120 年と 238 日の人生であった。

ちなみに当時の流行語には「パフォーマンス」「イッキ! イッキ!」「角抜き」「金妻」など、ヒット曲には「ジュリアに傷心」「恋におちて」「俺ら東京さ行くだ」など、ヒット映画には「ビルマの豎琴」「それから」「乱」「銀河鉄道の夜」「台風クラブ」などがあつた。

海外に眼を転じて、この年度には大きな出来事が目白押しに起こっていることに気づく。1985 年 10 月 15 日にはソビエト連邦 (当時) の共産党書記長ゴルバチョフがペレストロイカ (改革) を発表し、ソ連は民主化に大きな一歩を踏み出した。翌 86 年の 1 月 28 日のアメリカでは、スペースシャトルのチャレンジャー号が打ち上げから 73 秒後にフロリダ州中部沖の大西洋上で爆発・空中分解事故を起こし、乗組員 7 名が犠牲となった。2 月 26 日にはフィリピンの独裁者フェルディナンド・マルコス大統領がハワイに亡命し、民主化運動の指導者ベニグノ・アキノの未亡人コラソン・アキノが新大統領として組閣した。そして年度が改まった直後の 4 月 26 日には、ソ連 (当時) のチェルノブイリ原子力発電所が重大事故を起こしている。

このように昭和 60 (1985) 年度は、その直前・直後の時期も含め、日本国内・海外ともに歴史に残る大きな出来事が数多く起こっている。そんな混乱に引換え、開学から 13 年目を迎えた我が旭川医科大学は、安定期に入っていたといえよう。

年度が改まる直前の昭和 60 (1985) 年 3 月には福利厚生施設の増設工事、保健管理センターの新営工事、動物実験施設の増築工事がそれぞれ竣工し、60 年度には施設の新営・増築は一切行われていない。

4 月 1 日に歯科口腔外科学講座が新たに発足した。7 月 1 日には、再任された黒田学長 (当時) が新たな執行部を発足させた。ちなみに、教育研究および厚生補導担当の副学長には石橋宏法医学講座教授 (当時)、医療担当の副学長 (兼病院長) には鮫島夏樹外科学第一講座教授 (当時) が就任した。

今回は、広報誌「かぐらおか」(昭和 60 年 9 月 1 日付第 45 号) から、黒田学長の 2 期目の抱負を次頁以降に転載する。ちなみにサブタイトル「大学 (伝二章)」とあるのは中国の古典『大学』の中の同名の章のことで、引用文「苟日新 日々新 又日新」は、殷 (いん) 王朝を創設した湯王 (とうおう) が使った洗面・沐浴用の水盤に彫り込まれている言葉として同章で紹介されているもので、これを書き下ろすと、『まことに日に新たに、日々に新たに、また日に新たなり』となる。古典のタイトル『大学』と現代の高等教育機関としての大学とが一種の掛け言葉となって、アカデミックな雰囲気醸し出されている。古典に御造詣の深い黒田元学長ならではのサブタイトルである。

再任所感

学長 黒田 一 秀

苟日新 日日新 又日新 ——大学 (伝二章)

本誌に新任所感を書いて4年が経ち、このたび再任所感を寄せることになった。かつて記したように、今日も一貫して同じ運命が働いていると思う。関門に立たされる度に、大きな力の促しをうけて勇気を出して次の世界を歩き始めることになったと感じるのである。これまでお寄せ下さった皆様方の御好意に衷心から感謝している。副学長として御尽力戴いた小野寺、石井、吉岡教授には特に御礼申し上げたい。

この頃、大学を囲む景観のなかで、ひとつハッキリと気のつくことは、かぐらおか通りや環状一号線やニュータウン入口0号から登りになる豊岡かぐら線に沿って植えられたプラタナスやポプラや松の並木が、よく成長して立派な姿を見せるようになったことである。街路に沿って整列する木々の眺めは、人間が自然に加えた意志の表われとして道を行く者の心を打つ。23万㎡の用地に展開されている医大の建築群も同じく感銘をさそう。12年かけて整えられた美事な眺めである。一つ残念なのはキャンパスの植樹や緑化がまだ成功していないことである。これには理由のあることではあるが、緑が丘団地の並木が完成しているのだから、努力すればいずれ美しい緑を示してくれるであろう。計画の当初から北東の一角を大学の森と名付けてきている。幸い私達の10周年記念の続きとして垣沿いに植えた黒松とナナカマドは土と排水の工夫によって根付いてくれたようである。

昭和54年第1回卒業生を送り出してから本年の第7回まで全部で659名の医学士が世に出た。今度の7回生たちは学生定数120名の最初のクラスである。行く先々でよい評判を耳にする度に喜びを禁じ得ない。大学が揺がぬ実力を備えるのは卒業生の活動によるのである。20年経つと卒業生のなかから母校の教授が生れると前に述べたが、もっと早くても何も不思議はない。時代のテンポが変ればなおさらである。今、医師過剰問題に対応して学生定数を縮小しようという全国方針がうち出されているが、私達の学校のような、まだ卒業生の少い大学では、ここしばらくは優秀な卒

業生を多く送り出して層を厚くすることも考えておかねばなるまいと思う。これには同時に特別の努力をし、各教室としても、大学としても、新たな活動の場を広く学内外に用意することが必要であろうと思う。

大学入試について、教育臨調の答申、国大協の協議等によって2~3年のうちに大きな変更が加えられる様子であるが、本学では年々いくつかの改良を加えて現在著しい不都合はない筈でそれまで現行方式を踏襲して行くことになろう。

中央研究組織委員会が担当する動物実験施設、実験実習機器センターは予算措置施設となり、それぞれ歴代の施設長、センター長のすぐれた運営によって学内共同部門として大きな成功を収めている。同じ構想でよく活用されているRI研究施設はまだ学内措置でセンター長をお願いしている。RIは大学の規模による制限基準があるようで、本学ではDNA組替実験施設とRI施設とを組合せた新しい施設として予算措置を求めているところである。

臨床面でも講座の研究、病院の診療は専門化が進むばかりである。それぞれの教室出身者はその専門医になる。一方一線の医療を担当している市内開業医師は次第に高齢化が進むのに、なかなか後継者が見つからない、自分の子供が医師であっても専門医を指向しているからであるといわれる。患者側の専門医指向は別にして、住民には家庭医がほしいのに、医師を育成する大学は専門医ばかり送り出している。大学はこの問題にどう答えたらよいのか。これまで他人ごとのように扱われていたが、そろそろ医育機関としても対応しなければならぬと思われる。政府行政の施策ばかりが先行してよいものであろうか。われわれにも考を求めていると思う。もう一つ地域医療関連で、北海道地域医療振興財団が結成されようとしている。本学もその運営の一端を荷うことになろうが、教室単位の関与だけでなく大学としての対応組織が必要となると考えられる。

研究に国境はない。国境はあっても情報化時代の国

際協力がこれからますます頻繁になってくる。本学でも国際共同研究を進める教室がいくつもある。しかし実地診療をふまえた研究になると医師国際免許が必要になる。卒後専門医教育の国際化、ことに発展途上国の要請にどう応じるか。これも再検討課題である。

以上当面する問題の2~3を挙げてみた。行革、歳出抑制、超緊縮予算の年が続いているので、何処まで実現できるのかわからない。しかし将来計画委員会は理想と現実と両者を踏まえていなくてはならないわけである。

この6月、1週間ほどオーストリアの首都ウィーンに滞在した。18世紀末から19世紀中葉のウィーン学派の医学医療における貢献について、沢山の歴史的遺品を、大学内の資料館や医学博物館で目の当りにして

感銘を受けた。ドイツ語を軸として他民族を統合したヨーロッパ宗主国の華麗さとそれが崩壊したあともなお文化の荷い手としてある今のウィーンの伝統の力を感じた。旭川はやっと開基95年を迎えようとしているし、本学は開学12年に過ぎない。しかし研究や技術の先端部、日常生活の平均レベルでは大差はないのである。私達の大学が千古の都の大学と同じ伝統を誇れるのは私達の世代ではないが、数々の医学上の偉人を輩出したウィーン大学医学部にも創立10年の時はあった筈であると思い、大学人としての光栄と責任とを改めて反省したのであった。

再任に当って、石橋・鮫島両副学長の御就任を得、皆様とともに、大学100年のなかの与えられた期間を努めあげたいと覚悟を新たにしているところである。